発表タイトル	洛中洛外図屏風（歴博甲本）の登場人物
発表者所属名	日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館
発表者氏名	小島 道裕　http://www.rekihaku.ac.jp

現存最古の洛中洛外図屏風として知られる「歴博甲本」（国立歴史民俗博物館蔵）には、個人を特定できる人物像が描かれており、そこから絵の主題や制作の目的が分かってきました。

細川高国（1484〜1531）

室町幕府管領。細川政元の養子で、政元が暗殺された後、細川澄元との闘争に勝利して政権を握る。1525 年（大永 5）出家して息子の植国に跡を譲り、擁立した足利義晴には新しい御所を築く。

細川植国（1508〜1525）（左側）

細川高国の息子。1525 年 4 月に高国から家督を譲られるが、同年 10 月に急死。それによって絵の年代も特定できる。右は家臣の薬師寺国長か。

足利義晴（1511〜50）（建物の中、顔は隠されている）

室町幕府第 12 代将軍。京都を追われた 11 代将軍義澄の子。細川高国によって、11 歳の時に将軍とされた。

上臈三条氏息女（生没年不詳）（右から 2 番目）

内裏の上臈（最高位の女官・後宮構成員）候補だったが、幕府の懇請で将軍家の上臈となった。将軍御所が完成した際、足利義晴と同時に入居し、「一対の局」と呼ばれた。

この屏風は三条家に伝来したので、彼女への贈り物だったのかもしれない。

絵師＝狩野元信（1476〜1559）

狩野永徳の祖父。狩野派の大成者として知られる。描かれている場所は「狩野殿辻子」という通りで、元信の屋敷があった所。扇座の代表でもあった。

歴博甲本の主題と制作目的

この絵は、細川高国が、1525 年（大永 5）に、将軍足利義晴のために新たな御所を建て、息子の植国に家督を譲り、自らが打ち立てた政権とその統治下で栄える京都のありさまを描かせたものと考えられます。

（参考文献：小島道裕『描かれた戦国の京都―洛中洛外図屏風を読む―』吉川弘文館、2009 年）

※掲載した写真は、いずれも「洛中洛外図屏風歴博甲本」（国立歴史民俗博物館所蔵）